

ブルーノ・タウトが設計した ベルリン市ヴァイセンゼー地区の 集合住宅

田中 辰明

柚本 玲

お茶の水女子大学 名誉教授(生活環境教育研究センター) お茶の水女子大学 田中辰明研究室

はじめに

本誌先月号でブルーノ・タウトがベルリン市プレントラウアーベルク(Prenzlauer Berg)地区に設計した3つの住宅団地を紹介した。実際にはこの地区にブルーノ・タウトはカール・レギーンの住宅団地も設計している。カール・レギーンの住宅団地は2008年7月にユネスコの世界文化遺産に指定された。従って本誌では2008年12月号に「ユネスコの世界文化遺産に指定されたブルーノ・タウト設計による住宅団地」というタイトルで報告を行い、ここで紹介したので、前月号では省略した次第である。このプレントラウアーベルク地区の更に東北部にヴァイセンゼー(Weißensee)地区がある。Der Weißensee(白い湖)と呼ぶ美しい湖がこの地区の中心部にある。都会の中心にあって市民の憩いの場所になっている。ベルリンの中心部(ミッテ:Mitte)から凡そ8km離れた場所にすでに閑静な住宅地が広がっているのはうらやましい限りである。

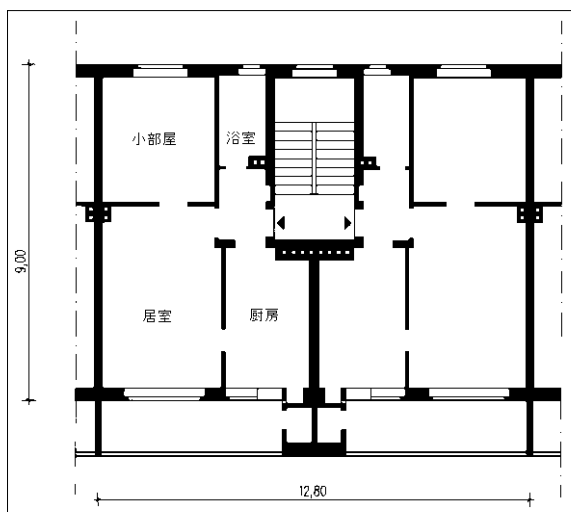


図2 ブッシュアレーの集合住宅、2室のタイプの平面図¹⁾

しかしこの地は東西ドイツ合併前は旧東ベルリンであった。ここではブルーノ・タウトが1920年代に建設をした2つの住宅団地を紹介する。

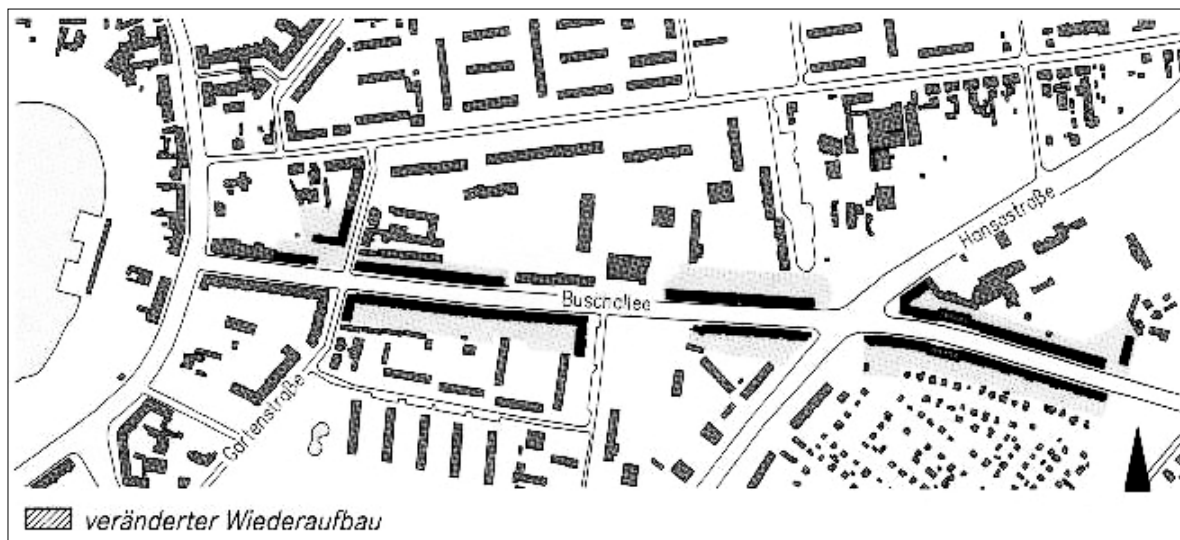


図1 ブッシュアレーの集合住宅配置図¹⁾



写真1 ブッシュアレーの北側道路に沿って建つ集合住宅



写真2 付設温室をともなったファッサード

1. ブッシュアレーの集合住宅 (Wohnanlage Buschallee)

この集合住宅はブッシュアレー(Busch Allee)、ガルテン通り(Gartenstraße)、ズルツフェルダー通り(Sulzfelderstraße)、ハンザ通り(Hansastraße)にあり、建築主はベルリン市の住宅供給公社ゲハーグ(GEHAG)、所有者はGSW (Gemeinnützige Siedlungs- und Wohnungsbaugesellschaft mbH: 団地・住宅共同利用会社)とバウベコン(BauBeCon)である。全住戸数は645



写真3 外壁窓の黄色い窓枠

写真4 外壁窓の赤い窓枠

戸である。1期工事は1925年から1926年に行われ、2期工事が1927年から1928年に、3期工事は1928年から1930年に、4期工事が1930年に行われている。1954年から1955年に戦災を受けた部分の修復が行われている。1993年から1998年にかけて記念建築物保全の修復が行われた。

図1に集合住宅の配置図を示すが¹⁾、殆どの集合住宅はブッシュアレーに沿って細長く建っていることが分かる。ブッシュアレーは現在路面電車が走っている東西に伸びる大通りである。図2にこの集合住宅の2室タイプの平面図を示す¹⁾。1住戸が57.6㎡という小住宅であるが、各戸に浴室が付いている。当時の勤労者住宅に浴室があるのは極めて珍しいことであった。また当時としては十分に広い厨房が設けられた。ベルリンという大都会



写真5 ブッシュアレーの集合住宅の道路側から中庭への通路



写真7 ブッシュアレー南側住宅の北側外壁にある玄関と階段室部分

のしかも中央部に近い場所にあって、田園生活を楽しむような工夫もされている。どの住宅もほぼ同じ作りで身分や貧富の差などを考えない生活が送れる事をタウトは常に考えていた。

写真1にブッシュアレーの北側道路に沿って建つ集合住宅を示す。住宅の前を路面電車が走ることから、騒音防止を目的として、建物に入って出来ていたバルコニーに外壁に沿ってガラス窓が入れられた。これによりバルコニーは現在で言うパッシブハウスの一つの手法である「付設温室」となったのである。ドイツではこれを「冬の庭



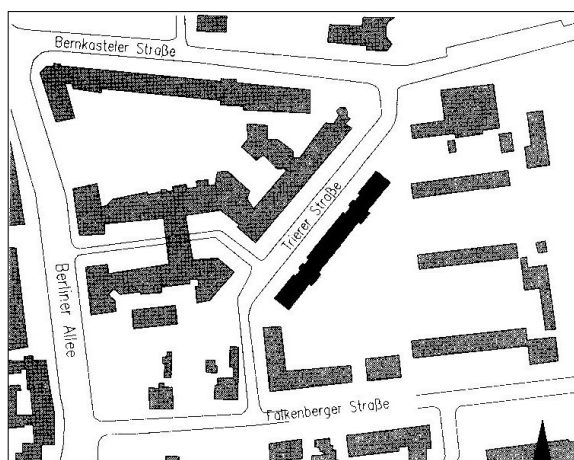
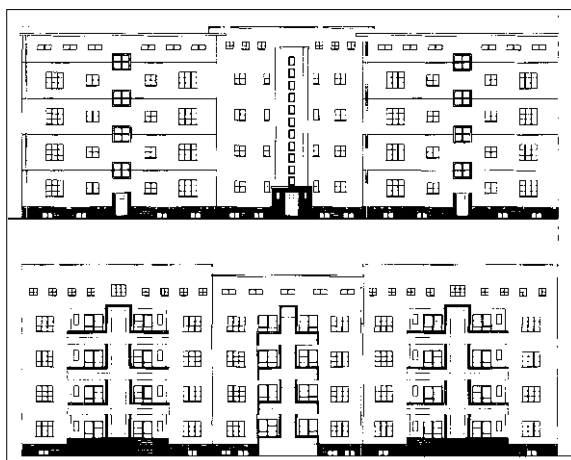
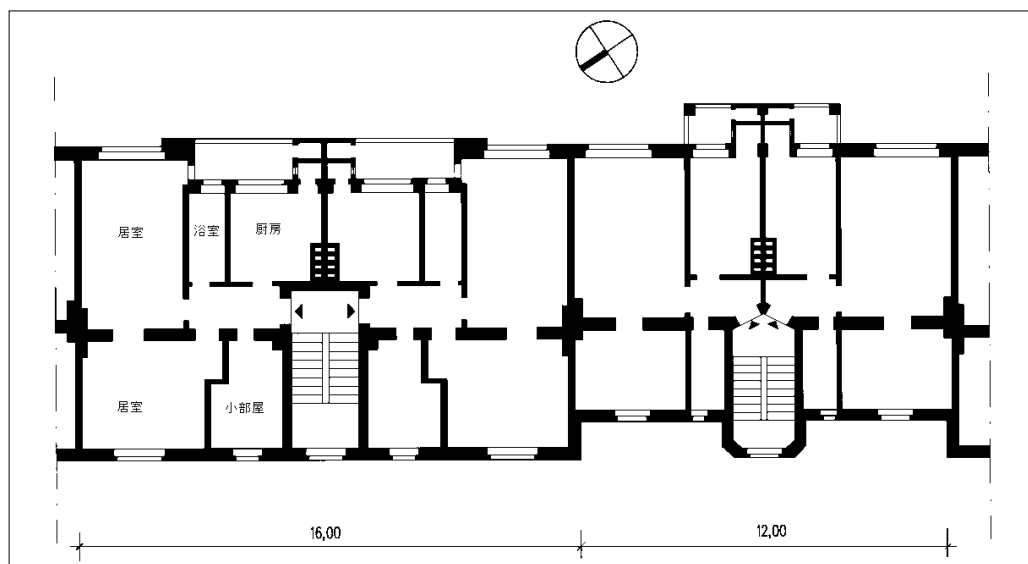
写真6 ブッシュアレーに沿った南側集合住宅の北側外壁



写真8 ハンザ通りに面するえび茶色に着色された集合住宅

(Wintergarten)」と呼んでいる。タウトは道路に沿って1 kmもある長い集合住宅を作ったが、ここでは色彩には配慮しなかった。ブッシュアレーとハンザ通りの角に建つ集合住宅に海老茶の彩色を施した程度である。**写真2**に建物外部へ張り出したバルコニーに路面電車の騒音を防ぐためにガラスを入れ、その結果「冬の庭」が出来た様子を示す。**写真3**にブッシュアレーの住宅の外壁窓の黄色い窓枠、**写真4**に同じく赤い窓枠を示す。**写真3**、**写真4**でガラス窓の外につけるシャッターが写っている。これは完全に閉めれば遮光になり、ゆるめに閉めればこぼれ日を室内に取り込むことも出来るものである。断熱効果もある。

写真5はブッシュアレーの集合住宅の道路側から中庭への通路を示す。**写真6**はブッシュアレーに沿った南側集合住宅の北側外壁を示す。北側は白色に塗装されている。この南側はバルコニーがあり、狭いながらも庭に面している。**写真7**はブッシュアレー南側住宅の北側外壁にある玄関と階段室部分を示す。**写真8**はハンザ通りに面するえび茶色に着色された集合住宅である。

図3 トリエラー通りの集合住宅、配置図¹⁾図4 トリエラー通りの集合住宅、立面図¹⁾図5 トリエラー通りの集合住宅、平面図¹⁾

2. トリエラー通りの集合住宅 (Wohnanlage Trierer Straße)

この集合住宅はトリエラー通り(Trierer Straße)にあり、建築主、所有者ともにゲハーグである。48戸の集合住宅である。1925年から1926年の間に建設され、1938年にファッサードの更新、1963年にファッサードの修理、1993年から1994年に記念建築物保全の修復が行われた。図3にこの集合住宅の配置図を示す¹⁾。南西から北東に伸びる配置となっている。トリエラー通りに面し、反対側にも集合住宅があるが、その逆側には空地がある。した

がって、トリエラー通りの反対側ファッサードにはバルコニーが設けられている。建物の中に取り込んだバルコニーと外部に突出して取り付けしたバルコニーがある。図4にこの住宅の立面図を示す¹⁾。図4の上部はトリエラー通り側(北西側)の立面図、下部は裏側、庭園側(南東側)の立面図である。図5にこの住宅の平面図を示す¹⁾。1室半の住宅と2室半の住宅が1組となっている。住棟の幅は10.5mで、床面積は1室半の住宅は60m²、2室半の住宅は84m²である。この図面で下部がトリエラー通りに面する方である。

本誌はカラーで印刷されないが、トリエラー通り側の1階は青色に、3階は海老茶色に、2階と4階は黄色の



写真9 トリエラー通りに面する外壁



写真10 庭側から見た外壁



写真11 青い窓枠と青い外壁



写真12 赤い窓枠



写真13 やや古くなったこの集合住宅の玄関扉

強い黄土色に彩色されている。平面的に少し入り込んだ1室半の住宅がある部分は白色に彩色されている。裏の庭園側に回ると、2室半の住宅部分は黄色の強い黄土色にして建物に入り込んだバルコニー部分は縦と横に白い塗装を行いアクセントを強めている。その白色の上部を青い線が塗装されている。1室半部分では海老茶色に塗装され、建物から外に突出したバルコニー部分は白色に塗装し、アクセントを付けている。この写真は筆者が2009年4月に訪独した際に撮影したものである。何とも派手な彩色である。ベルリンのような北部にある都市（北緯52.3°）は冬になるとどんよりした黒い雲が垂れ込み、何時になるとそれが晴れるのか全くわからない、かつ昼間の時間が短くなってしまう。このような陰鬱な季節にはタウトが彩色した派手な色が人間に良い心理的な効果をもたらすのである。写真9にトリエラー通りに面する外壁を示す。写真10にトリエラー通りと反対側、すなわち庭側の外壁を示す。写真11にこの集合住宅で用いられた青い窓枠と青い外壁を示す。写真12にこの集合住宅の赤い窓枠を示す。写真13に何回かの修理にもかかわらず、さすがにやや古くなったこの集合住宅の玄関扉を示す。

3.1920年代のベルリン

現在でこそ黄金の1920年代と呼ばれるが、これは後世になって付けられた呼び方であって、当時はとてもそのような時代ではなかった。1914年に勃発した第一次世界大戦にドイツは敗北、1921年には払いきれない巨額な賠償金を突きつけられている。1919年に理想的な国家と見られたヴァイマル共和国が発足するが、その脆弱性をつかれ、1920年にはナチス党が結成された。1923年にはフランス軍にルール地方を占拠され、破局的なインフレが起きている。

一方1919年に工芸と建築の学校バオハウスが創立され、1924年にはトーマス・マンが『魔の山』を著し、1927年にはハイデッカーが『存在と時間』を、カール・ヤスパー



図6 第一次世界大戦後のベルリンの劣悪な集合住宅(ハインリッヒ・チレ)²⁾

スが『哲学』を著す。このように、音楽、芸術も花を開き、一瞬の素晴らしい時代でもあった。しかし賠償金支払いの為に工業化されたドイツ、特に都会の労働者の生活は厳しく、その「住宅は監獄のようであった」とも言われている。

労働者の生活を多数絵に描いたのがハインリッヒ・チレ(Heinrich Zille)である。その絵の一つを図6に紹介する²⁾。この絵では弟の面倒を見させられていた娘が、貧乏長屋の上階から顔を出す母親に「お母さん、フリッツのおしめがびしょ濡れだよ!」と叫んでいる。母親は「陽の当たるところに置ときな!」と答えている。しかし、本誌では縮小され読めないであろうが奥のほうで手を取り合い環を作って遊んでいる子供たちは皆笑顔である。ハインリッヒ・チレの絵において親は生活苦に喘いでいるものの、次代を担う子供たちは皆笑っている。

「賠償金など払わなくて良い」とし、密かに再軍備を始めたナチス党は国民の支持を得、1932年には第1党にのしあがっている。そして1933年ヒトラーが首相に指名され、その年ブルーノ・タウトはナチス政権を逃れて来日する。ドイツは第二次世界大戦でも敗戦、大都市は再建

不能のように木っ端微塵の被害を受ける。これは第一次世界大戦で敗戦し、また第二次世界大戦で敗戦し、それでも現在気が付けば世界中の高速道路をドイツ車が鼻高々と走り回っているというようなゲルマン魂をチレは一枚の絵に凝縮させてのでないかと筆者は考える。

ゲルマンの神話に「神々の黄昏」というのがあり、ゲルマンの神様には黄昏があるのである。しかし黄昏からまた新しい息吹が出、再度栄えると言うストーリーである。ブルーノ・タウトも第一次大戦の敗戦、その後のつかの間の繁栄、そして極めて短期間にベルリンに12,000戸の集合住宅を建設し、台頭するナチス政権を逃れてあこがれの日本へ来た。しかし憧れの地はタウトを迎え入れるには条件が悪かった。このような波乱に満ちた生涯を送った人であった。しかし多くのタウトの作品をベルリンで見ると毎日毎日実に充実した真剣な日々を送っていたことが十分に伺われる。

謝辞 調査研究を行うに当たり、平成20年度科学研究費補助金(課題番号20700575)、ECO HOUSE株式会社より研究助成金を得た。また現地ではAxel Jahn博士、Gerd Sowitzkat氏に調査の協力をしていただいた。記して謝意を表す。

<参考文献>

- 1) Manfred Speidel: Ich liebe die japanische Kultur: Gebr. Mann Verlag Berlin (2004)
- 2) Herbert Reinöf. Das neue Zille Buch Fackelträger verlag Schmidt-Küster GmbH
- 3) 田中辰明監修: THE 世界遺産「ベルリンの近代集合住宅群」: TBS(2009年5月24日)
- 4) ブルーノ・タウト著、篠田英雄訳: 日本タウトの日記: 岩波書店(1975)
- 5) 田中辰明, 柚本玲: ブルーノ・タウト設計による円形住宅「チーズカパー」: 建築仕上技術: Vol.34, No.403(2009/2) p.49-53
- 6) 田中辰明, 平山積久, 柚本玲: ブルーノ・タウト(Bruno Taut)の作品と建築設備の変遷: 空気調和・衛生会論文集: No.136(2008) p.1-5
- 7) 柚本玲, 平山積久, 田中辰明: 41646: ブルーノ・タウトが設計した住宅の暖房設備に関する調査研究: 2008年度日本建築学会学術講演会(2008/9) p.1327-1328
- 8) 田中辰明, 柚本玲: ユネスコの世界文化遺産に指定されたベルリンのブルーノ・タウト設計による住宅団地: 建築仕上技術: Vol.34, No.401(2008/12) p.49-54
- 9) 田中辰明: 建築家マックス・タウトの業績と生涯: 建築仕上技術: Vol.34, No.400(2008/11) p.76-81
- 10) ワタリウム美術館編集, Manfred Speidel: ブルーノ・タウト 桂離宮とユートピア建築: オクターブ(2007/05)
- 11) 水原徳言: Bruno Taut 年表: 群馬県工業試験場(1987/6/1)
- 12) Annete Menting Max Taut Das Gesamtwerk DVA: Deutsche Verlags-Anstalt GmbH(2003)
- 13) Ausstellung der Akademie der Künste vom 29. Juni bis 3. August 1980, Bruno Taut (1880-1938)
- 14) Winfried Brenne: Bruno Taut Meister des farbigen Bauens in Berlin: Deutscher werkbund Berlin e.V. (Hg.) (2005)